

〈研究ノート〉

## 中学校道徳教科書にみる「友情」

— 学校外での関係づくりを題材とした読み物に着目して —

歌川 光一, 濱野 義貴

Discourses on “Friendship” in Moral Textbooks of Junior High School in Japan:  
Focusing on Friendship outside the School

Koichi UTAGAWA, Yoshiki HAMANO

### 1. 本稿の目的

本稿の目的は、2017年改訂学習指導要領に基づいた中学校道徳教科書に描かれる「友情」の特徴を、学校外での関係づくりを題材とした読み物の検討から明らかにすることにある。

2000年代以降の子ども・若者に関する社会学研究において、「友達」は、その定義が曖昧で不透明であるがゆえに同調圧力や過剰な敏感さをもたらすものとして捉えられ、学校での友達との関係をめぐる緊張や違和感が「友だち地獄」(土井2008)、「スクールカースト」(鈴木2012)等で表現されてきた。辻泉は、2000~2010年代の子ども・若者の友人関係に果たす学校空間の役割について、(クラスや部活のような)凝縮性の高い集団が関係作りに寄与するというよりも、むしろ単なる出会いの場となっている、という変化が見られるとする(辻2016:78-80)。同時に、友人との「出会いの場」は、「学校」に収斂してきていると指摘している(同上)。一般的に「友達」は、自由で「緩い」(藤野2018)プライベートな人間関係の問題であるにせよ、子ども・若者にとっての友人関係の実態やイメージに対する「学校」の影響は現代でも小さくないことが見て取れる。

筆者らは上記の関心に基づいて、教育・保育が「友達」をめぐる問題にどの発達段階でどのようにどの程度介入すべきかを再検討し、体系的のあるカリキュラムを構想することを目的として、(保育所・)幼稚園・小学校・中学校の要領や教材に着目し、顕在的カリキュラムとしての「友達」「友情」の取り扱われ方について検討を重ねている(水引・歌川2017, 歌川・岡邑2017, 岡邑・歌川2018, 水引・歌川・濱野2018, 歌川2018)。

先の辻(2016)らの指摘も踏まえれば、学校が友達と出会う場として重要な機能を果たしている現代の子ども・若者にとって、学校外での友達との出会いや友情の深まりは、多様な友情観を育む上で意義が大きいと考えられる。一方で、学校の教育内容に目を転じると、単元として直接的に「友情」を扱う道徳の読み物教材(2015年一部改訂学習指導要領準拠)には、「趣旨としては『友達』の範囲を学校に限定してはいないものの、〔中略…引用者〕特別活動との関連付けが強く意識されていること等が主な原因となって、学級が同じであることと友達であることの境界や場に応じた友達との距離感、友情が芽生えるプロセスが

見えづらい」といった課題がある（歌川・岡邑 2017:83）。顕在的カリキュラムとして「友達」「友情」の取り扱い方を構想する上で、「友情」を直接的に扱う特別の教科・道徳の教科書における、友達との関係作りの扱われ方の「学校（学級）内／学校外」に着目すること、とりわけ、関連する先行研究でも十分に検討されてこなかった「学校外での関係づくり」の表象を検討することは、重要な作業の一つと考えられる。

本稿は、友人関係の問題が先鋭化しやすい中学校段階の検定済みの道徳教科書（2019年度より使用）中の学校外での関係づくり（本稿における「学校外」とは、「その時点で中学校の同級生ではない」ことを示す）を題材とした読み物の特徴を検討することで、「友情」のあり方に触れる学校教育実践について示唆を得ようとするものである。

## 2. 2017年改訂学習指導要領・同解説における「友情、信頼」

中学校道徳科の単元「友情、信頼」の目的は「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。」であり、そのうち友情に関しては、以下のように解説されている。

真の友情は、相互に変わらない信頼があって成り立つものであり、相手に対する敬愛の念がその根底にある。それは、相手の人間的な成長と幸せを願い、互いに励まし合い、高め合い、協力を惜しまないという平等で対等な関係である。友達を「信頼」するとは、相手を疑う余地がなく、いざという時に頼ることができると信じて、全面的に依頼しようとする気持ちをもつことであり、その友達の人間

性に賭けることである。相手の人柄に親しみを感じ、敬愛する気持ちをもち続けることである。分かち合い、高め合い、心からの友情や友情の尊さについて理解を深め、自分を取り囲む友達との友情をより一層大切にする態度を育てることが大切である。〔中略…引用者〕青年前期にある中学生は、心身の成長は目覚ましいが、不安定な時期でもある。感情の起伏が目立ち、ともするとささいなことから感情の行き違いが生じ、せつかくの友達関係が台無しになることもあるが、これらの悩みや葛藤を乗り越えることで、真の友情は培われていくものである。

（文部科学省 2017:40, 下線部一引用者）

この「真の友情」の深まりという教育目標を受け、中学校の検定済道徳教科書（8社、見本本）に掲載されている「友情、信頼」に関わる読み物一覧を示したのが表である。（歌川）

## 3. 学校外での関係を扱った中学校道徳教科書関連作品の特徴

今回収集した中学校道徳の検定教科書中の「友情、信頼」をテーマとする54作品（同作品の複数カウント含む）のうち、学校外での関係づくりを題材とした読み物12作品（同作品の複数カウント含む、表の下線部参照のこと）は、主人公はすべて男性（子）であり、台詞のある女性の登場人物が含まれるのは1作品（「あるピエロの物語」（学研））である。また、12作品中、「雨の日のレストラン」（日本教科書）を除く11作品は二者間の友情を扱っており、最終的に男性（子）同士の絆を確認し合う展開となっている。

磯辺菜々は、テキスト（絵本）から「友情」のあり方を抽出するために、関連する先行研究から以下のような「友情」の4類型を示している（磯辺 2017）。まず、友情を捉える視点として、第一

表 中学校道徳教科書における「友情，信頼」に関わる読み物（8社）

東京書籍	学校図書	教育出版	光村図書
①「短文投稿サイトに友達の悪口を書くと」 ①「班での出来事」 ②「ゴール」 ②「みんなでとんだ！」 ③「私を支えてくれた言葉」 ③「合格通知」	①「旗」 ①「いつも一緒に」 ②「ゴリラのまねをした彼女を好きになった」 ②「千五百メートル走」 ③「五月の風」 ③「鏡の中の私」	①「最強の敵 最大の友」 「瀬戸 ライバル追って」 「銅」 ①「チョコの行方」 ②「たすきとボンボン」 ②「本当の友達って」 ③「僕は友達を裏切ったのか？」 ③「フットライト」	①「いちばん高い値段の絵」 ①「親友」 ②「友達はライバル」 ②「違うんだよ，健司」 ③「私がピンク色のキャップをかぶるわけ」 ③「嵐の後に」
日本文教出版 ※ノートあり	学研	廣済堂あかつき ※ノートあり	日本教科書
①「近くにいた友」 ①「部活の帰り」 ①「旗」 ②「五月の風—ミカー—」 ②「ライバル」 ②「恋する涙」 ③「違うんだよ，健司」 ③「ゴリラのまねをした彼女を好きになった」	①「あるピエロの物語」 ①「クラスメイト」 ①「吾一と京造」 ②「サキとタク」 ②「星置きの滝」 ③「私たちの夏」 ③「二人のエース」	①「アイツ」 ①「吾一と京造」 ②「嵐のあとに」 ②「アイツとセントパレンタインダー」 ③「ライバル」 ③「アイツの進路選択」	①「いつもいっしょに」 ①「ちゅうたがくれたもの」 ①「リョウとマキ～First Love～」 ②「リョウとマキ～Triangle Zone～」 ②「雨の日のレストラン」 ②「昭和の大スターと平成の大スター」 ③「一通のメッセージから始まる物語」 ③「嵐の後に」 ③「リョウとマキ～Stand by me～」

注1) ○内の数字は学年を表す。

注2) \_\_\_\_\_は学校外での関係づくりを題材とした読み物を表す。

注3) 以下，読み物資料を引用する際は，本文中の一部である。

に，同質性重視か異質性尊重か，第二に，「友情」の成立範囲が特定の関係に閉じられているか外部へと開いているか，があるとする（同上：20）。その上で，同質性を軸にするものを「融合型」，異質性を尊重するものを「自律型」，また関係が内部に閉じているものを「内部収束型」，外部へと開くものを「外部拡大型」と名付け，「内部収束—融合」「内部収束—自律」「外部拡大—融合」「外部拡大—自律」という友情の4類型を作成している（同上：20-21）。

磯辺はこの類型をテキストに適用する際に，そのストーリー展開に着目し，「友情」の深まりの契機となる葛藤や試練を指標としている。2.でも確認したように，中学校道徳教科書においても「真の友情」に至る過程の葛藤等が描かれやすいことから，磯辺の分類は本稿の考察にも適している。

この4類型を用いると，今回抽出した学校外で

の関係づくりを題材とした読み物12作品はすべて内部収束型と言えるが，外発的試練によって友情が成立する「内部収束—融合型」と，内発的葛藤によって友情を確認する「内部収束—自律型」，もしくはその双方にまたがっている読み物に分けることができる。

以下，実際の該当箇所を確認していきたい。

### 3-1. 内部収束—融合型

まず，内部収束—融合型の読み物の展開を具体的に見てみよう。

第一に，三社で掲載されている「嵐の後に」（光村図書，廣済堂あかつき，日本教科書）の展開についてみてみる。本作品は，父の近海操業を手伝う勇太が，水産高校時代の同級生で「ふらふらした生活を続ける」明夫（父親同士も水産高校の同級生で，「いまだにどんなささいなことも毎日のように語り合い，相談為合」う仲）を，近海

操業に誘うことを契機に友情を深める内容である。勇太は幼なじみである明夫と水産高校時代頃から疎遠になり始め、「ときどき顔を合わせながらも、とりとめのない話をするばかり」で、「とがめることもできない」関係でいたが、漁師見習いとなって共に働き始めながらも「総じて感心できない」働きぶりの明夫と正面から向き合おうとする。

この作品は、勇太と明夫が、全く疎遠というわけではない状態から、嵐という外発的試練を契機に友情を確認する展開と言える。以下は、試練を経て二人が本音を交わす場面である。

「明夫、今までどこで何やとったんよ。待とったんぞ。」  
「わかとったよ……、だから、戻ってきた、ここに。」

第二に、「雨の日のレストラン」(日本教科書)について試みる。本作品は、「職場が変わったばかり」で「慣れない仕事や仲間、事務機器の新しいシステム操作に疲労困憊する日々を過ごしている」サラリーマンの「俺」が、土砂降りの雨の中、大学時代の友人たちとの夕食の約束を億劫に思いながらも参加し、自分同様に多忙な毎日を送る友人の姿に触れ、図らずも勇気づけられることとなる。

この作品では、「俺」意外に「渡辺」「田中」「桜井」という同性の友達のみが登場しており、中学校とは直接的関連のないが、それぞれに抱えている仕事や土砂降りの雨が外発的試練となっている。

第三に、「いちばん高い値段の絵」(光村図書)について試みる。本作品は、貧乏な画家だったミレーが、既に有名になっていた(が、「それほど豊であったわけではなかった」)ルソーに「君の絵を買いたいという人がいてね、僕が頼ま

れて代わりにやって来たんだ。」と絵を購入してもらうが、死期が近づいた頃になって、その絵はルソー自身が購入したと知るといものである。

この作品では、ルソーの死が外発的試練となっている。

第四に、「ちゅうたがくれたもの」(日本教科書)を試みる。本作品は、高校三年生になった「僕」を、小学校入学から六年生になるまで友人だったちゅうた(小学校でいじめられていたが「僕」は助けたわけではなかった)が訪問し、「僕」は初めてちゅうたの気持ちを知ることになるが、その後すぐにちゅうたの事故死により死別してしまうという話である。以下は、結果として「僕」が最後にちゅうたと会話をした場面である。

「じゃあなぜ僕に会いに来たの?」とたずねた。ちゅうたは当然という顔で、こう言った。

「おまえだけは俺を馬鹿にしなかった、ただ一人の友達だからだろ。」

ドッキッとした。そんな風に思っていたのか。違う。違うんだ。僕は…過去を呼びもどすのに時間はかからなかった。ちゅうたが言うようなそんな友達じゃなかったんだ。ちゅうたのことをどこかで馬鹿にしたり、面倒くさいと思っていたことだってあったんだ。

この作品では、小学生時代のいじめっ子とちゅうたの死という二つの外発的試練への後悔がストーリーの軸となっている。

### 3-2. 内部収束—自律型

次に、内部収束—自律型(内部収束—融合型とまたがる読み物を含む)の展開を具体的に見てみよう。

第一に、「星置きの滝」(学研)を試みる。本作品は、給仕時代の筆者が、「二年か三年に一度

くらいしか会えないが、会えば共に肩を抱き合う」「人生の支えとなっている心の友」であるI君に夜学で知り合い、星置きの滝でのキャンプでの出来事を契機に近づくようになった様子が描写されている作品である。以下はキャンプでの様子である。

「うわあ、きれいだなあ、星がいっぱいだ！」  
思わず私も空を見上げた。〔中略…引用者〕  
「どうしてあんなにきれいなんだろう。きっとあれなんだ。星の一つ一つがお互いに輝き合おうとしているからなんだ。」  
とI君は言った。  
「輝き合う！？」  
「ああ。お互いに輝き合おうとしているからあんなに美しいんだよ、きっと。」  
〔中略…引用者〕急に涙があふれてきた。今の私にかけられないI君の豊かな心が、今さらながら胸に染みしてくるようだった。

この作品の執筆時において、筆者とI君は顔を合わすことが可能な状況にあるが、作品としては敢えて過去のI君が回顧されている。筆者にとってI君との異質性が葛藤の原因でもあり、またそれが魅力となって関係が継続していることが示されている。

第二に、「最強の敵 最大の友」(教育出版)、「二人のエース」(学研)をみってみる。

「最強の敵 最大の友」(教育出版)は、2016年のリオデジャネイロオリンピック・競泳男子400メートル個人メドレー決勝で、それぞれ金、銅メダルを獲得した同学年の萩野広介と瀬戸大也に関する異なる二つの新聞記事(「一人じゃない」「瀬戸ライバル追って『銅』」)を挙げ、互いに「ライバル」として感謝しつつ東京オリンピックに向かう様子が紹介されている。

「二人のエース」(学研)でも、萩野広介と瀬戸

大也の、小学校3年生からメダル獲得に至るまでの「切磋琢磨」、「健闘をたたえ合う」関係について紹介している。「ライバルの軌跡」として、両者の関係が見開き2ページにわたって年表に整理される構成となっている。

このように「最強の敵 最大の友」(教育出版)、「二人のエース」(学研)では、児童期からの長期間の内発的葛藤が互いの成功につながっていることがアピールされている。

第三に、生徒作品の「私がピンク色のキャップをかぶるわけ」(光村図書)をみってみる。本作品は、水泳で全国大会に出ることを夢にする「私」と、毎回レースで顔を合わせるが一度も言葉を交わしたことがない、鮮やかなピンク色のキャップをかぶるMとの関係を描いたものである。

以下は、5年間顔を合わせていたMが突然姿を現さなくなり、喪失感を感じていた「私」が、人づてにMが病気のために水泳を継続できなくなったことを知った上で受け取った、Mからの手紙である。

俺は骨の病気で水泳ができなくなった。おまえと同じように全国を目指してきたから、夢が絶たれて残念だ。もちろん、おまえには関係がないし、気にする必要もない。だが、一つだけわがママを許してほしい。おまえが行けるところまで、俺も行けたと思いたい。おまえが行けないところには、俺も行けなかったと思いたい。だから、おまえの記録をただ見守ることを許してほしい。小さな体で必死に粘るおまえの泳ぎが好きだった。一度おまえと水泳の話がしたかった。

ライバルへ。Mより。

頭の中が真っ白になった。Mがどんな気持ちでこれを書いたのだろう。彼の「わがママ」の中身と、勝ち負けを繰り返したこの5

年間のことが頭を駆け巡り、心が震えた。初めて見たMの字が涙でにじむ。目を閉じ、「ライバル」の文字をまぶたに焼き付けた。その日以来、私はキャップをピンク色に変えた。言葉は交わさなくても、私たちはライバルであり、同志であり、そして大切な友だった。

この作品も、5年間顔を合わさないという葛藤状態にありながら、Mの病気によって友情が深まるという、内部収束—融合型、内部収束—自律型にまたがる作品と言える。

第四に、「あるピエロの物語」(学研)をみてみる。同作品は、サーカス団の動物小屋の掃除などの雑用に追われる「内気なサム」の前に、同業の「陽気なトム」が表れ友情を深めるが、次第にトムが「調子に乗っている」として職場で疎まれ、反対に(トムのアイデアによってサーカスのピエロを始めた)サムの人気が出るといったように関係が逆転し、サムがトムの盗難疑惑から不信を深めて友情を失ってしまうという物語である。

この作品では「ライバル」という語は出てこないが、同業で性格も対照的な二人が、互いに忠告をし合いながら友情を深めていく展開であり、結果として別離が訪れるが、最後までその異質性が強調されている。本作品では「炊事長」と呼ばれる中年女性が、以下に示すように、友情を深める要所でサムにアドバイスをする場面があり、サムとトムのホモソーシャルな関係を引き立てている。

①**炊事長** 「友達がほしい。」……当たり前だろ？

**サム** はい、当たり前です。……でも、おれみたいに、モッサリしてたら友達できませんよね。

**炊事長** (突然どなる) しっかりおしよ！そんなにウジウジしてるからダメなんだよ！

②**炊事長** 言いたかないけどね、トムの評判、良くないよ。

**サム** ……はい、知ってます。

**炊事長** サム、お前から、トムに忠告するのがいちばんじゃないのかね。「調子に乗るな。」って。

[中略…引用者]

**サム** もし、おれが忠告して、トムが怒っちゃったら……たった一人の友達が……友達じゃなくなっちゃう……それが、怖いんです。

**炊事長** (あきれて) へーえ。サムとトムは、その程度の友達だったのかい。わかったよ！

③**炊事長** お前さんだけは、トムの弁護をしようと思ったんだけどね。

**サム** 弁護したくても、証拠がないよ。

**炊事長** 証拠がないと弁護できないのかい？見損なったよ。

この作品は、炊事長のアドバイスも受けながら、友人同士で互いに忠告し合うといった内部収束—自律型の展開を見せるが、最終的にはトムの盗難疑惑という外発的試練に打ち勝てなかった状態が描かれていると言える。(濱野)

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、2017年改訂学習指導要領に準拠した中学校道徳教科書に掲載されている読み物における「友情」の特徴を、学校外での関係づくりを中心的に扱った作品の検討から明らかにしてきた。

一般的に「友情」を含む友人関係の持ち方については、男性間では関心を共有した上での相互の自律が、女性間では相互への関心に基づくケアが重視されやすいというジェンダー・バイアスはしばしば指摘される(辻2015, 藤野2018:159-169)

ほか)が、学校外での友情を扱った中学校道徳教科書の読み物では、そもそも女性(子)間の友情が扱われていなかった。また、既に成り立っている男性(子)の二者間の友情が深まる過程が中心的に描かれる場合も、磯辺の類型による「外部拡大」型を見ることができなかった。教材の使用に際しては、登場人物のジェンダーや、「友情」の深まり方のパターンを中心とするストーリー展開のバランスに配慮した指導が必要だろう。

なお、本稿は学校外での関係という視点から「友情」のあり方の検討した結果、関連するすべての読み物教材が男性(子)間という同性間の友情を題材としたものであった。これはすなわち、中学校の道徳教科書において、内容項目「友情、信頼」の目標中の「異性についての理解」は学校内での関係として描写されていることを意味する。

女性(子)間の友情や「異性についての理解」の取り扱い方も含む、中学校道徳教科書における友情のジェンダー表象、「友達」をめぐるカリキュラムの接続のあり方については、稿を改めて検討することとしたい。(歌川)

## 付記

本稿の執筆にあたり、科研費・基盤研究(C)「社会の形成者としての資質を涵養する特別活動の積極的な生徒指導機能の実証的研究」(中村豊研究代表, 18K02548)の助成を受けた。

## 引用・参考文献

- 土井隆義(2008)「友だち地獄」, ちくま新書
- 藤野寛(2018)「友情の哲学——緩いつながりの思想——」, 作品社
- 磯辺菜々(2017)絵本に描かれる「友情」イメージと友情至上主義の社会学的分析, 教育・社会・文化, 17, 15-35.
- 水引貴子・歌川光一(2017)「友達」をめぐる保育内容(人間関係)と生活科, 道徳, 特別活動のカリキュラムの接続とその課題——2017年改訂学習指導要領・

- 幼稚園教育要領の検討を中心に——, 敬心・研究ジャーナル, 1(2), 131-137.
- 水引貴子・歌川光一・濱野義貴(2018)友達との関係づくりをめぐる小学校第一学年の顕在的カリキュラムの検討——生活科教科書と道徳の読み物教材の比較から——, 敬心・研究ジャーナル, 2(1), 129-134.
- 文部科学省(2017)「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科道徳編」
- 岡邑衛・歌川光一(2018)高校生のコミュニケーション能力を育む学級集団に関する一考察——特別活動が目指す「望ましい集団活動」を視野に入れて——, 甲子園大学紀要, 45, 1-5.
- 鈴木翔(2012)「スクール(教室)内」カースト」, 光文社新書
- (2015)友だち, 本田由紀編著「現代社会論」, 有斐閣, 79-101.
- 辻大介(2015)つながる——友人関係とジェンダー——, 伊藤公雄・牟田和恵編「ジェンダーで学ぶ社会学〔全訂新版〕」, 世界思想社, 189-201.
- 辻泉(2016)友人関係の変容——流動化社会の「理想と現実」——, 藤村正之・浅野智彦・羽瀨一代編「現代若者の幸福—不安感社会を生きる」, 恒星社厚生閣, 71-96.
- 歌川光一(2018)「友達」をめぐる幼保小連携に向けて——保育内容・生活科・道徳——, 現代保育問題研究会編「現代保育内容研究シリーズ3 保育をめぐる諸問題」—藝社, 33-45.
- ・岡邑衛(2017)小中学校における「友達」をめぐる顕在的カリキュラムの検討——道徳の読み物教材に描かれる友情——, 昭和女子大学現代教育研究所紀要, 3, 75-84.
- 吉本篤子(2017)ジェンダーに配慮した道徳教育の指導法の検討——読み物資料と学習指導要領に着目して——, 愛知大学教職課程年報, 7, 71-83.

(うたがわ こういち 初等教育学科)

(はまの よしき 明星大学通信制大学院  
教育学研究科博士前期課程)

受理年月日 2018年10月1日

審査終了日 2018年11月27日